

田村のつぶやき 第36号

2025.1.10 発行

文責：島根県立江津高等学校長 田村康雄

白戸家

CM総合研究所の調査によるCM好感度ランキング（BRAND OF THE YEAR）で毎年上位にランクインしているCMのひとつにソフトバンクの「白戸家の人々」シリーズがあります。シリーズの放映が始まった2007年から8年連続で好感度1位を獲得し、現在も高い人気を誇っています。ちなみに2024年度の第1位は、日清食品の「チキンラーメン」、2023年度の第1位はau(KDDI)の「三太郎シリーズ」でした。

さて、「白戸家」シリーズは「予想外な家族」というコンセプトのもと、不条理さと親しみやすさを併せ持つストーリー展開と、芸能人のみならずスポーツ選手や文化人などさまざまなジャンルのほか、旬の人物から懐かしのスターなど幅広いゲスト出演者が話題となっています。白戸家は、樋口可南子さん演じるお母さん（白戸正子）、上戸彩さん演じる娘アヤ、アヤの兄（小次郎）はアフリカンアメリカンで、お父さん（白戸次郎）はなんと犬！まさに「予想外の家族」で、ありえない設定です。そういえば、島根のおじさまとしてアクアスのシロイルカが登場したこともありました。お父さん犬は、昔ながらの「ガンコ親父」で口うるさい古風な親父です。しかし、白戸家ではお父さんが怒っていても、犬が吠えているようにしか見えず（実際のところ犬が吠えているわけで…）、家族はどこかお父さんを軽くいなしている感じです。もし、お父さんの声を担当している北大路欣也さんがそのまま父親役で登場していたら、全く違ったイメージになってしまうでしょう。お父さんを犬にしたという設定は秀逸です。

白戸家の娘役の上戸彩さんは、2002年のTBSドラマ『3年B組金八先生』（第6シリーズ）で性同一性障害の生徒（鶴本直）を演じました。私自身は性同一性障害という呼称には抵抗がありますが、戸籍上の性別変更を可能とする法律の名称が「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（性同一性障害特例法）」であるため、この呼称が使われています。最近では「性別違和」・「性別不合」という呼称も使われ始めています。また「害」の漢字を用いず「障がい」と表記するケースも目にします。ドラマに話を戻すと、2002年時点でこのテーマを扱うのは相当難しい判断だったと思いますが、昨年5月に他界された『金八先生』の脚本家小山内美江子さんには強い思いがあったのでしょう。鶴本がカミングアウトする第19回の放送回は、一昨年話題になったドラマ『VIVANT』の福澤克雄監督が演出を手がけ、18.4%の視聴率を記録しました。「白戸家」の家族は、人種、種を超えた多様性を意識したキャスティングですが、上戸さんをキャスティングしたのは、金八先生のドラマのことが念頭にあったのかは定かではありません。

性的マイノリティに関する理解も、少しずつですが進んでいます。「LGBT」という言葉も浸透してきました。性的マイノリティは、この4つのカテゴリーに限定されるものではなく、LGBTのほかにも、身体的性、性的指向、性自認等の様々な次元の組み合わせによって、多様な性的指向・性自認を持つ人々がいます。例えば、クエスチョニング、Xジェンダーと表現される人々もいます。こうした多様性を示すために、「LGBTQ」や「LGBTs」と表記されることもあります。さらに最近では、性的指向（Sexual Orientation）と性自認（Gender Identity）の英語の頭文字をとった「SOGI」という表現もあります。